

琉球大学学術リポジトリ

沖縄の低学力問題に関する実証的研究 (2)

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2008-05-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西本, 裕輝, Nishimoto, Hiroki メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/6027

沖縄の低学力問題に関する実証的研究(2)

西 本 裕 輝 (大学教育センター)

Hiroki Nishimoto

Problems of Low Academic Achievement in Okinawa II

はじめに

2007年10月25日、沖縄の教育界に衝撃が走った。文部科学省が2007年4月に、43年ぶりの全国一斉学力テストを実施したが、その結果が公表されたのである。結果は沖縄の児童・生徒の正答率はどの学年でもどの教科でもすべて全国最下位であった。本研究の目的は、全国最下位の沖縄の学力をどう向上させたらよいかについて、今回の文科省発表のデータを参考にしながら独自の調査データの分析に基づいて検討することである。

この全国一斉学力テストは、全国の小学校（6年生）と中学校（3年生）の全児童・生徒を対象として実施され、一部の公立や私立が参加していないものの、合計約225万人が参加し、現時点でもっとも信頼性の高い学力調査データと言えるであろう。学力テストは国語と算数（数学）で行われ、基礎を示すAと応用を示すBに分けられる。つまり、小学生の国語（AとB）、算数（AとB）、中学生の国語（AとB）、数学（AとB）というように細かく分類すると8種類の学力テストからなるわけであるが、その8種類すべてにおいて、沖縄の正答率は全国最下位であった。中には中学数学Aのように、正答率で全国平均を15ポイントも下回るものもある。沖縄は復帰以来、学力がもっとも低い地域として知られており、今回の調査であらためてそれが確認される形となった。しかも県外では私立小中のうち約4割が参加していないため、実際にはもっと大きな差があると認識した方がいいだろう。

また低学力と関連し、沖縄の厳しさを示すデータは多い。大学・短大への

進学率が全国平均で51.5%と初めて5割を超える中、沖縄は全国最下位の31.0%にとどまっている。高校進学率も全国最下位（全国97.70%、沖縄95.20%）、低進学率がもたらす低学歴の問題とも関連するであろうが、完全失業率（全国4.10%、沖縄7.70%）や離婚率（千人あたり全国2.08件、沖縄2.71件）もまた全国1位である。さらに、県民一人あたりの平均所得が200万円にも満たない全国最下位（全国2,978千円、沖縄1,987千円）であるにも関わらず、合計特殊出生率は全国1位（全国1.26人、沖縄1.72人）であり、子育てには厳しい環境となっていると言える。このように沖縄は、低学力の問題にとどまらず、それと連鎖したさまざまな問題を長年抱えてきたと言え、危機に瀕していると言える。

こうした問題に対処するため、沖縄県ではこの20年余り、「学力向上対策」（いわゆる「学対」）に取り組んできたが、全国平均との格差は依然として大きいと言わざるを得ない。今回の文科省の調査結果で最下位から脱出できなかったことは、県の教育関係者を落胆させるに十分なものであったろう。筆者自身、県内外でさまざまな学力調査を行ってきた経験から、今回の結果がある程度予想はしていたものの、やはりショックは大きい。

さらに近年、2002年の学習指導要領の改訂にともなって、学習内容の3割削減等、全国的な学力低下が指摘されており、こうした状況から沖縄は、もともと「低学力」の状態にあったところに「学力低下」の波が押し寄せ、いわば「二重の学力問題」を抱えていると言え、この特殊な状況を鑑みるに、早急な対策が必要であると思われる。

以上のような問題関心から、ここでは沖縄の学力をどう保障するかについて検討したい。具体的には、沖縄の小中学生の状況を調査（学力テスト+質問紙）により把握し、低学力の現状を、特に文化的要因に着目しながら正確に把握する。また、沖縄の生徒の現状を把握するためには県外の状況と比較する必要がある。ゆえに、県外においても同時期に、同様の調査を行った。

1. 調査の概要

文科省が実施した全国一斉学力テストの特徴は、国語と算数(数学)の学力テストだけでなく、それと同時に児童・生徒の生活習慣や学習環境などを問う質問紙調査も行っていることである。この中では、朝食の摂取や就寝・起床時刻、家族との会話、テレビの視聴時間など、家庭での様子を細かく尋ねている。そしてこうした背景には、子どもの学力と家庭環境が大きく関連しているという前提がある。

こうした前提は、これまでの教育社会学を中心とした調査研究の蓄積から明らかになったものであると言える(例えば、荻谷・志水 2004, 西本 2004)。例えば、筆者が行ってきた一連の研究でも、今回文科省がこのような調査を実施する以前から、学力テストと子どもの生活実態調査を同時に実施して分析することにより、基本的な生活習慣を含めた家庭環境と学力との関連について実証的に明らかにしてきた。後にも示すがその中では例えば、規則正しい睡眠をとっている子ども、朝食をきちんと食べている子ども、親子間のコミュニケーションが活発な子どもほど、学力が高いことが明らかになっている。

ここではそうした文科省の学力調査結果も引用しながら、今後可能となる分析、例えば、学力の県別比較、低学力の要因の県別比較等を具体的にシミュレートしながら、本調査データを分析し、考察を進めていきたい。

調査は2005年11月末に北海道、広島、島根、沖縄の4つの道県の公立小中学校に調査票を配布し、2006年3月までに郵送により回収した。調査対象は、小学5年生1664名、中学2年生1720名である(詳しくは表1-1参照)。児童生徒調査票は、学級の規模、学級での学習状況、学級生活や教師について、家庭での勉強や生活の状況の他、国語、算数(数学)に関する簡単な学力テスト(いわば基礎学力を問う問題)からなっている。国語は、漢字の読み取り、つなぎことば、表現等に関する3問(小5)、2問(中2)からなり、算数は四則演算、数の表現、図形に関する3問、数学は四則演算、数式・方程式に関する2問からなる。制限時間は各教科10分である。なお、学力テ

トの問題には新学社の作成した学力検査を使用した。調査時期や学習の進度に若干の違いがあるため、学力テストは一学年前の内容から作成されている。例えば、小学5年生の問題は、4年生の内容からなっている。したがって調査時期や学習進度の違いによる学力差は理論上生じない調査のデザインとなっている。

表 1 - 1) 調査対象の属性

		N				%			
		学校		児童生徒		学校		児童生徒	
		小学校	中学校	小学校	中学校	小学校	中学校	小学校	中学校
全 体		58	29	1,664	1,720	66.7	33.3	49.2	50.8
県	北海道	5	5	268	379	8.6	17.2	16.1	22.0
	広島県	45	18	884	800	77.6	62.1	53.1	46.5
	島根県	4	2	154	65	6.9	6.9	9.3	3.8
	沖縄県	4	4	358	476	6.9	13.8	21.5	27.7
性別	男子			828	855			51.0	50.6
	女子			795	834			49.0	49.4

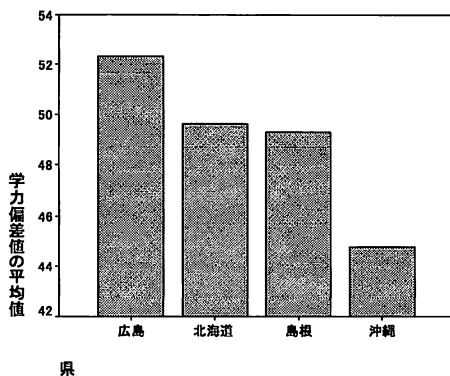
なお、ここでいう学力には、国語と算数(数学)の2教科の偏差値(平均50)を用いる。

2. 県別学力差の確認

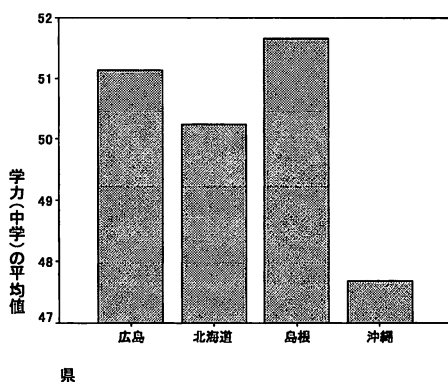
では最初に、本調査結果から県別の学力格差について確認しておきたい。県別に比較した場合、やはり沖縄が最も低いのだろうか。

小学生の場合では、分散分析により確認したところ、有意な差が見られた。次のグラフに示すように、広島52.35、北海道49.60、島根49.29、沖縄44.80であり、やはり沖縄が最も低かった(1%水準で有意)。

グラフ 2-1) 県別学力比較 (小学生)



グラフ 2-2) 県別学力比較 (中学生)



中学生の場合でも沖縄がもっとも低く、広島51.13、北海道50.24、島根51.67、沖縄47.68となっている(1%水準で有意)。

実は、今回の文科省の全国学力調査でも、こうした県別の学力(学力テストの正答率)が示されており、沖縄の結果は残念ながら最下位であった。本調査でも他県とかなりの学力差があることが確認できる。

3. 学力の規定要因

先ほどもふれたように、ここでは低学力の要因として先行研究にならって、主に家庭環境に注目しながら分析を進める。最終的には沖縄の学力の低い原因、特に沖縄の家庭環境が県外に比べてどう違うかに注目するが、まずは一般的分析として、沖縄に限らず、学力の規定要因について、分析から確認しておきたい。具体的には、基本的な生活習慣、保護者の関わり方、家庭の文化等が、学力に与える影響について検討する。

(1) 全体的傾向

最終的には重回帰分析を行うが、まずは分散分析等により、一つ一つの変数を個別に、家庭環境要因を中心に学力との関係について言及したい。

なお、繰り返すが、ここで示す学力得点は、国語と算数（数学）の合計点を偏差値（平均値50）に変換した数値を用いる。また、**は統計学的に1%水準で有意、*は5%水準で有意であることを示す。小学生、中学生に分けて結果を示していきたい。

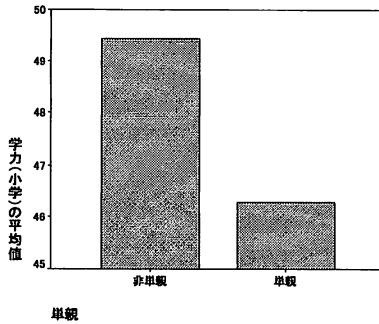
① 単親家庭と学力の関係

まずは、家庭環境変数としての単親家庭（母子家庭あるいは父子家庭）について見てみたい。次の図表から明らかのように、単親家庭の方が非単親家庭に比べて学力が低くなっている。

右側の表から非単親家庭の学力偏差値が49.44であるのに対し、単親家庭は46.28となっている。同じ数値を視覚的にわかりやすくしたのが左側の表である。中学生の場合でも同様の傾向が見受けられる。

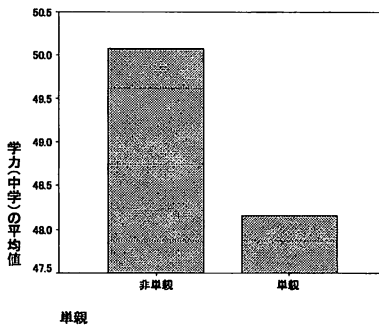
後に示す図表でも、上下同じものを並べてある。なお、図表3-1-1で数値がどちらの群も平均の50を超えていないのは、家庭環境について回答していない地域があり、欠損値があるからである。以降の結果もそのあたりを念頭に入れて見ていただきたい。

図表 3-1-1) 単親と学力の関係 (小学生)



単親	N	平均値	標準偏差	確率
学力(小学) 非単親	918	49.44	8.63	**
単親	220	46.28	9.80	

図表 3-1-2) 単親と学力の関係 (中学生)



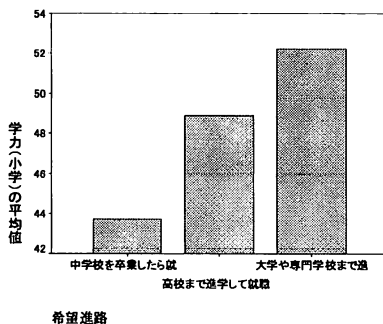
単親	N	平均値	標準偏差	確率
学力(小学) 非単親	967	50.08	8.60	**
単親	231	48.16	9.11	

②希望進路と学力の関係

次に、本人の希望進路と学力の関係である。次の図表から明らかのように、

より高い目標を持っている子どもの方が学力は高いことが示されている。その傾向は中学生の場合も変わらない。

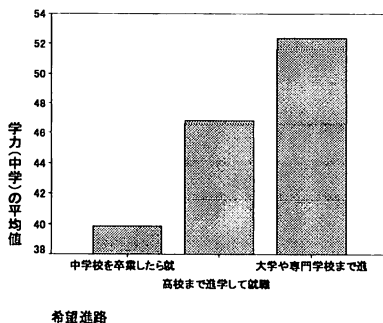
図表3-1-3) 希望進路と学力の関係 (小学生)



学力 (小学)

	度数	平均値	標準偏差	確率
中学校を卒業したら就職したい	96	43.76	10.74	**
高校まで進学して就職したい	747	48.90	8.61	
大学や専門学校まで進学したい	780	52.20	7.40	
合計	1623	50.18	8.50	

図表3-1-4) 希望進路と学力の関係 (中学生)



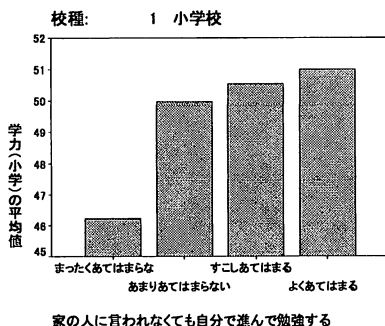
学力 (中学)

	度数	平均値	標準偏差	確率
中学校を卒業したら就職したい	30	39.83	9.50	**
高校まで進学して就職したい	601	46.83	8.98	
大学や専門学校まで進学したい	999	52.40	8.29	
合計	1630	50.11	9.08	

③家庭での学習状況と学力の関係

次に、家庭での学習状況「家の人に言われなくても自分で進んで勉強する」について分析したものが次の図表である。「よくあてはまる」と回答した子どもほど学力が高くなる傾向にある。この傾向は中学生の場合も変わらない。

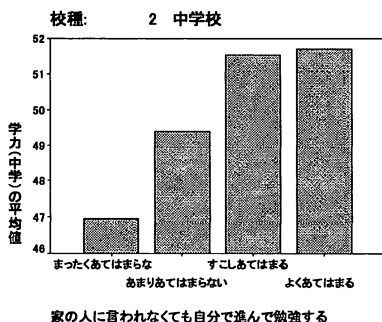
図表 3-1-5) 家庭での学習状況と学力の関係 (小学生)



学力 (小学)

	度数	平均値	標準偏差	確率
まったくあてはまらない	174	46.22	10.66	**
あまりあてはまらない	411	49.97	7.76	
すこしあてはまる	545	50.55	8.19	
よくあてはまる	512	51.02	8.41	
合計	1642	50.09	8.56	

図表3-1-6) 家庭での学習状況と学力の関係(中学生)



学力(中学)

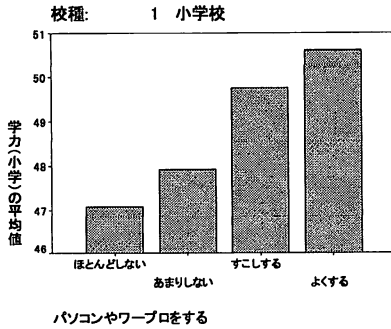
	度数	平均値	標準偏差	確率
まったくあてはまらない	284	46.95	9.34	**
あまりあてはまらない	553	49.39	8.97	
すこしあてはまる	534	51.53	8.71	
よくあてはまる	293	51.70	8.67	
合計	1664	50.06	9.06	

④保護者の文化的活動と学力の関係

保護者の文化的活動と学力の関係を検討したものが次の図表である。この文化的活動というのは、再生産論で言うところの正統文化にあたる活動のことである。

例えば、次の図表では、保護者の活動として「パソコンやワープロをする」かどうか尋ねたものであるが、「よくする」と回答する子どもの方が学力は高くなる傾向にある。その傾向は中学生でも見られる。

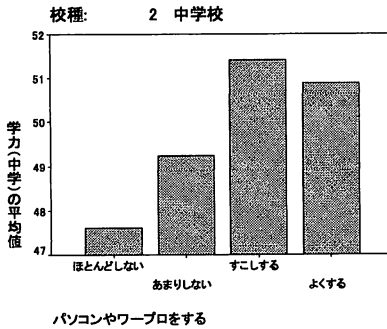
図表 3-1-7) パソコンやワープロをすると学力の関係 (小学生)



学力 (小学)

	度数	平均値	標準偏差	確率
ほとんどしない	330	47.07	8.91	**
あまりしない	150	47.91	9.34	
すこしする	204	49.76	7.68	
よくする	432	50.61	8.52	
合計	1116	49.04	8.73	

図表 3-1-8) パソコンやワープロをすると学力の関係 (中学生)

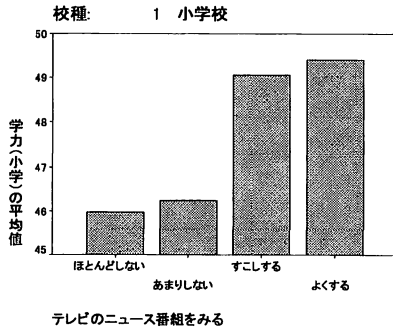


学力 (中学)

	度数	平均値	標準偏差	確率
ほとんどしない	363	47.61	9.08	**
あまりしない	170	49.24	8.75	
すこしする	271	51.41	7.91	
よくする	379	50.88	8.50	
合計	1183	49.76	8.72	

「テレビのニュース番組をみる」についても同様の傾向が見られた。やはり、保護者の文化的活動は子どもの学力影響を与えているようである。

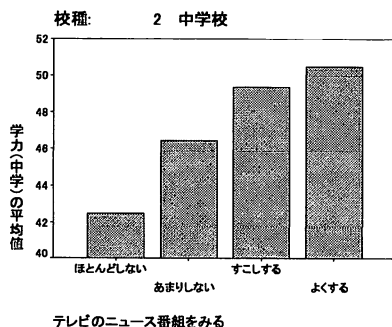
図表3-1-9) テレビのニュース番組をみると学力の関係 (小学生)



学力 (小学)

	度数	平均値	標準偏差	確率
ほとんどしない	35	45.98	9.08	**
あまりしない	59	46.24	9.68	
すこしする	254	49.06	8.01	
よくする	776	49.42	8.70	
合計	1124	49.06	8.65	

図表 3-1-10) テレビのニュース番組をみると学力の関係 (中学生)



学力 (中学)

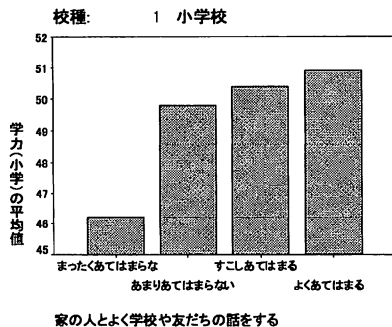
	度数	平均値	標準偏差	確率
ほとんどしない	25	42.47	10.01	**
あまりしない	76	46.43	9.06	
すこしする	307	49.37	8.99	
よくする	773	50.50	8.35	
合計	1181	49.78	8.72	

⑤親子のコミュニケーションと学力の関係

次に親子のコミュニケーションに関する項目についてである。「家の人とよく学校や友だちの話をする」という質問に対し、「よくあてはまる」と回答した子どもの学力は高くなる傾向にある。その傾向は小学生の場合も中学生の場合も変わらない。

ちなみに、今回の文科省の調査でも、「家の人と学校での出来事について話をしていますか」という、ほぼ同様の質問があるが、話をしている子どもほど学力が高くなる傾向が見られ(例えば小学生国語Aの場合、「している」と回答した子どもの学力テスト正答率が83.9なのに対し、「していない」と回答した子どもの正答率は74.4となっている)、本調査結果と一致する。

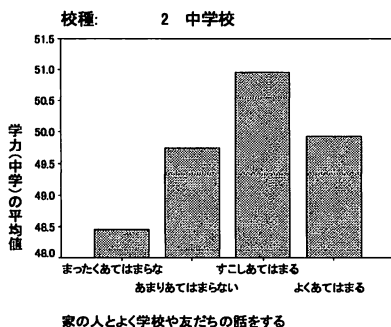
図表 3-1-11) 保護者との会話と学力の関係 (小学生)



学力 (小学)

	度数	平均値	標準偏差	確率
まったくあてはまらない	144	46.20	10.36	**
あまりあてはまらない	311	49.81	8.48	
すこしあてはまる	478	50.40	8.35	
よくあてはまる	706	50.93	7.89	
合計	1639	50.15	8.47	

図表 3-1-12) 保護者との会話と学力の関係 (中学生)

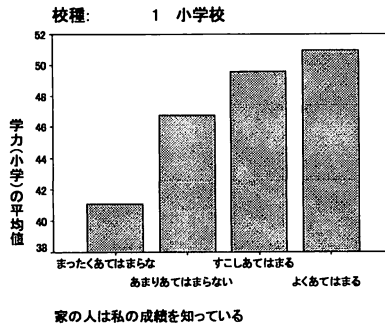


学力 (中学)

	度数	平均値	標準偏差	確率
まったくあてはまらない	230	48.46	9.82	**
あまりあてはまらない	438	49.75	9.37	
すこしあてはまる	527	50.95	8.95	
よくあてはまる	480	49.93	8.54	
合計	1675	50.00	9.10	

また、保護者の子どもの成績への関心についても尋ねている。「家の人は私の成績を知っている」という質問について「よくあてはまる」と回答した子どもの学力は高くなる傾向にある。これも親子のコミュニケーションを示す項目であると考えられる。

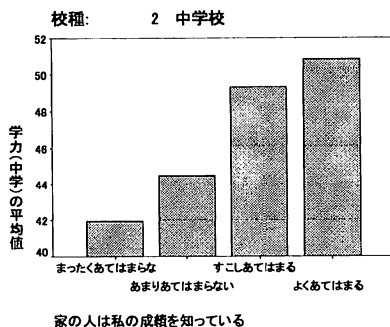
図表 3-1-13) 保護者の成績への関心と学力の関係 (小学生)



学力 (小学)

	度数	平均値	標準偏差	確率
まったくあてはまらない	43	41.05	11.62	**
あまりあてはまらない	105	46.75	9.32	
すこしあてはまる	361	49.60	8.33	
よくあてはまる	1130	51.00	7.97	
合計	1639	50.16	8.46	

図表3-1-14) 保護者の成績への関心と学力の関係(中学生)



学力(中学)

	度数	平均値	標準偏差	確率
まったくあてはまらない	21	41.97	10.31	**
あまりあてはまらない	87	44.50	9.74	
すこしあてはまる	405	49.30	9.60	
よくあてはまる	1159	50.81	8.61	
合計	1672	50.01	9.10	

以上のことから、親子のコミュニケーションと学力の関連が深いことが明らかになった。そしてこれらの結果は文科省の調査結果とも一致する。

⑥生活習慣と学力の関係

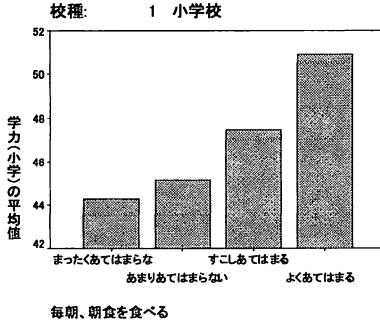
文科省調査でも特に重視されているのが、基本的な生活習慣である。近年、文科省が「早寝早起き朝ごはん」国民運動を推進しているのは、こうした基本的な生活習慣を見直していくことが学力向上に繋がるという視点に基づいている。

本調査でも食事や睡眠について尋ねた項目があるので、それについて見てみたい。

まず朝食の摂取状況についてであるが、「毎朝、朝食を食べる」という質問に対し、図表から、あてはまると回答した子どもほど学力が高くなってい

ることがわかる。結果は小学生の場合も中学生の場合も同様である。

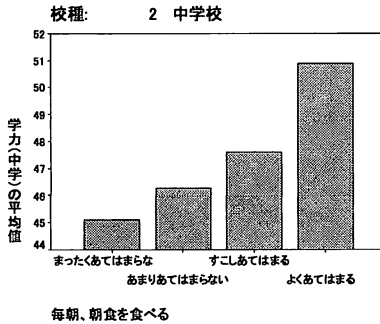
図表 3 - 1 - 15) 朝食の摂取と学力の関係 (小学生)



学力 (小学)

	度数	平均値	標準偏差	確率
まったくあてはまらない	32	44.27	11.28	**
あまりあてはまらない	73	45.12	10.42	
すこしあてはまる	187	47.49	10.47	
よくあてはまる	1356	50.91	7.74	
合計	1648	50.14	8.48	

図表 3 - 1 - 16) 朝食の摂取と学力の関係 (中学生)



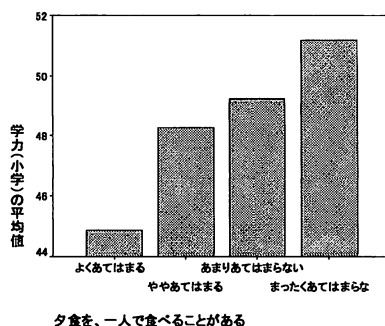
学力 (中学)

	度数	平均値	標準偏差	確率
まったくあてはまらない	46	45.10	9.96	**
あまりあてはまらない	100	46.27	9.64	
すこしあてはまる	225	47.60	9.72	
よくあてはまる	1302	50.89	8.71	
合計	1673	50.01	9.09	

なお、今回発表された文科省の調査結果でも、「朝食を毎日食べていますか」という本調査とほぼ同様の質問に対し、例えば小学生国語Aの場合、「している」と回答した子どもの学力テスト正答率が82.8であったのに対して、「全くしていない」68.9と差がついており、本調査結果と一致している。

次に夕食の摂取状況についてであるが、「夕食を一人で食べることもある」という質問に対して、「まったくあてはまらない」と回答した子どもほど学力が高くなっている。夕食時の一家団欒という家庭環境が重要であることを示していると言える。

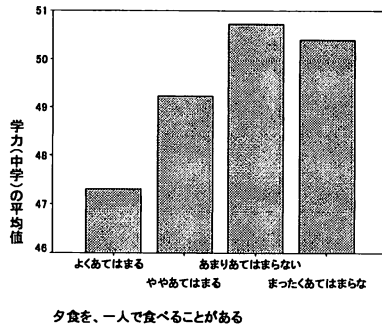
図表 3 - 1 - 17) 夕食の摂取状況と学力の関係 (小学生)



学力 (小学)

	度数	平均値	標準偏差	確率
よくあてはまる	101	44.88	9.76	**
ややあてはまる	177	48.28	9.42	
あまりあてはまらない	307	49.23	9.00	
まったくあてはまらない	1056	51.19	7.76	
合計	1641	50.12	8.50	

図表 3 - 1 - 18) 夕食の摂取状況と学力の関係 (中学生)



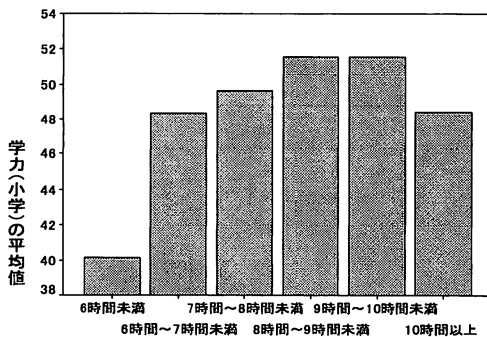
学力 (中学)

	度数	平均値	標準偏差	確率
よくあてはまる	162	47.32	9.16	**
ややあてはまる	260	49.24	9.57	
あまりあてはまらない	463	50.72	9.00	
まったくあてはまらない	780	50.40	8.87	
合計	1665	50.01	9.09	

次に睡眠についてである。まずは睡眠時間であるが次のグラフから、睡眠時間が長くなるほど学力が高くなる傾向が明らかになる。睡眠時間6時間未満の子どもの学力偏差値は40.2であるが、睡眠時間が長くなるにしたがって上昇し、8時間以上9時間未満の子どもの学力偏差値は51.6となっている。ただし、10時間以上と小学5年生としては少し長すぎる睡眠時間の子どもは逆に学力が下がるようである。

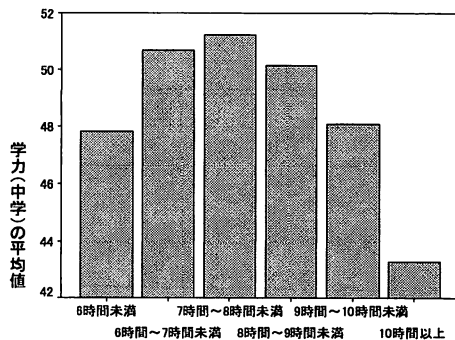
ピークは異なるものの同様の傾向は中学生でも見受けられる。

グラフ3-1-1) 睡眠時間と学力の関係(小学生)



ふだん(月曜-金曜)、1日の睡眠時間はどのくらいですか

グラフ3-1-2) 睡眠時間と学力の関係(中学生)



ふだん(月曜-金曜)、1日の睡眠時間はどのくらいですか

(2)主成分分析による変数の縮約

家庭環境が学力に与える影響について個別に見てきたが、次は重回帰分析により、さまざまな変数を投入して、より詳しくその影響関係について検討したい。だがその前に、重回帰分析に用いる変数を精選しておく必要がある。

よってここでは、主成分分析により、情報を縮約しておきたい。

①家庭での学習

まず家庭での学習状況の項目について主成分分析を行った。それが次の表である。

成分1は「学校の授業の予習や復習をやる」「家の人に言われなくても自分で進んで勉強する」「学校での宿題はきちんとやる」「家で落ち着いて勉強できる」等の項目からなる。よってこれを「家庭での学習順調度」と命名した。

表3-2-1) 家庭での学習に関する主成分分析結果 (バリマックス回転)

	成分	
	1	2
学校の授業の予習や復習をする	.720	.063
家の人に言われなくても自分で進んで勉強する	.711	.003
学校や塾の宿題以外に進んで勉強する	.689	.145
分からない問題があれば、教科書や参考書で調べる	.678	.090
学校の宿題はきちんとやる	.655	-.084
家で落ち着いて勉強できる	.639	.066
テスト前には計画をたてて勉強する	.511	.190
分からない問題があれば、家の人に教えてもらう	.455	.086
新聞を読む	.168	.661
時間をみつけて物語や小説を読む	.284	.640
テレビやラジオ、音楽をつけながら勉強する	-.168	.528

成分2は、「新聞を読む」や「時間をみつけて物語や小説を読む」といった、学校での学習には直接関係ない読書行動の項目からなっている。そこで「余暇読書」と命名した。

後の重回帰分析では、固有値等を勘案して、成分1「家庭での学習順調度」(の主成分得点)のみを投入する。

②家庭の文化

次に、保護者の行動について主成分分析を行った。

表3-2-2) 家庭の文化に関する主成分分析結果 (バリマックス回転)

	成分	
	1	2
歴史小説や歴史の本を読む	.781	.027
文学作品や小説を読む	.740	.067
クラシックの音楽を聴く	.620	.125
ピアノをひく	.608	-.039
パソコンやワープロをする	.500	.283
テレビのニュース番組をみる	.054	.752
新聞を読む	.107	.701
スポーツ中継をみる	.061	.700
歌番組をみる	.048	.456

成分1は、「歴史小説や歴史の本を読む」「文学作品や小説を読む」「クラシックの音楽を聴く」など、文化的に高度とされる項目からなっている。よって「正統文化志向」と命名した。同様に成分2は、メディア接触に関する項目からなっているため「メディア志向」と命名した。

後の重回帰分析には、固有値等を勘案して成分1「正統文化志向」のみを用いる。

③家庭での生活

次に、親子関係も含めて家庭での生活状況についての項目の主成分分析を行う。

表 3-2-3) 家庭での生活に関する主成分分析結果 (バリマックス回転)

	成分			
	1	2	3	4
家の人は、自分のことをよく分かってきている	.807	.084	.109	-.028
私は、親を尊敬している	.748	.029	.169	-.028
家の人とよく学校や友だちの話をする	.672	.229	.026	.044
家の人は私の成績を知っている	.401	.251	.209	.263
ふだん(月-金) 朝起きり、夜寝たりする時間が決まっている	.116	.742	-.036	.011
毎朝、朝食を食べる	-.001	.582	.340	.106
学校に持っていく物は、前の日にそろえる	.269	.571	-.013	-.109
学校から帰った時には、家にはいつも大人がいる	.031	.274	.652	.010
寝坊しそうになったら、家の誰かが私を起こしてくれる	.214	-.091	.567	.237
夕食を、一人で食べることがある	-.213	.063	-.522	.453
家の人に「勉強しなさい」とよく言われる	-.107	-.165	.218	.735
家には本がたくさんある	.341	.168	-.077	.519

成分1は、「家の人は、自分のことをよく分かってきている」「家の人とよく学校や友だちの話をする」「家の人は私の成績を知っている」等、保護者(親)と子どものコミュニケーションを示す項目からなっている。よって「親子のコミュニケーション」と命名した。

成分2は、「ふだん朝起きたり、夜寝たりする時間が決まっている」「毎朝、朝食を食べる」等、基本的な生活習慣についての項目からなっている。よって「生活習慣」と命名した。

以下同様に、成分3、4と続くが、寄与率や固有値を考慮し命名しなかった。後の重回帰分析では、成分1「親子のコミュニケーション」と成分2「生活習慣」を用いる。

(3) 重回帰分析による学力の規定要因分析

最後に、重回帰分析により、各変数の影響を同時に検討したい。

①分析に用いる変数

その前にまず、重回帰分析に投入する変数について以下に整理しておきたい。

- ・女子：男子＝0，女子＝1のダミー変数
- ・単親：非単親＝0，単親＝1のダミー変数（単親＝父子家庭もしくは母子家庭）
- ・希望進路：中学校を卒業したら就職したい＝1，高校まで進学して就職したい＝2，大学や専門学校まで進学したい＝3
- ・家庭での学習順調度：主成分分析によって抽出した成分1の主成分得点（表3-2-1参照）
- ・正統文化志向：主成分分析によって抽出した成分1の主成分得点（表3-2-2参照）
- ・親子のコミュニケーション：主成分分析によって抽出した成分1の主成分得点（表3-2-3参照）
- ・生活習慣：主成分分析によって抽出した成分2の主成分得点（表3-2-3参照）
- ・学力：国語と数学（算数）の学力検査の偏差値（平均50）

②重回帰分析

以上の変数を用いて重回帰分析を行った結果を次に示す。

まず、小学生の結果を示したのが表3-3-1である。

表 3-3-1) 学力の規程要因分析 (小学生、R = .336**)

	非標準化係数		標準化係数	t	確率
	B	標準誤差	ベータ		
(定数)	42.856	1.126		38.058	**
女子	1.191	.523	.073	2.276	*
単親	-1.642	.670	-.078	-2.452	*
希望進路	2.627	.456	.192	5.765	**
家庭での学習順調度	.297	.326	.035	.912	
正統文化志向	-.347	.268	-.043	-1.293	
親子のコミュニケーション	.771	.297	.091	2.592	*
生活習慣	1.201	.287	.148	4.190	**

有意な影響を与えているのは、女子、単親、希望進路、親子のコミュニケーション、生活習慣である。

β 値から、男子よりも女子の方が、高い進学意識を持っている方が、親子のコミュニケーションが円滑な方が、生活習慣が身につけている方が、学力が高いと解釈できる。一方、単親であれば学力は低くなると言える。

中学生の結果は有意に効く変数が増えているが、ほぼ同様となっている。女子、希望進路、家庭での学習順調度、正統文化志向、生活習慣が有意な影響を与えている。

これらの結果は先ほど個別に見てきた結果と特に矛盾はない。

表 3-3-2) 学力の規程要因分析 (中学生、R = .472**)

	非標準化係数		標準化係数	t	確率
	B	標準誤差	ベータ		
(定数)	36.656	1.268		28.919	**
女子	1.904	.480	.111	3.969	**
単親	-.347	.629	-.016	-.552	
希望進路	4.991	.470	.302	10.611	**
家庭での学習順調度	1.587	.283	.178	5.614	**
正統文化志向	1.071	.267	.120	4.013	**
親子のコミュニケーション	-.396	.258	-.046	-1.533	
生活習慣	.721	.257	.083	2.802	**

4. 沖縄の低学力の要因～沖縄県と他県の比較を通して

これまでの分析では、家庭環境が学力に与える影響は大きいということが明らかになった。小学生では、「性（女子）」「単親」「希望進路」「親子のコミュニケーション」「生活習慣」が有意な影響を与えており、中学生では、「性」「希望進路」「家庭での学習順調度」「正統文化志向」「生活習慣」が有意な影響を与えていた。

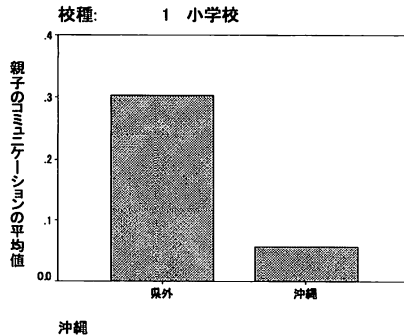
ここではこうした全体的傾向もふまえて、主にこれらの有意な影響を与えている変数について、沖縄県とそれ以外の県で比較を行う。例えば「生活習慣」を比較した場合、沖縄の方が乱れているのであろうか。ここではそうした問題を小・中合わせて検討する。

(1) 親子のコミュニケーション

「単親」「希望進路」については特に2群間で差異は見られなかった。

小学生の場合で学力に有意な影響を与えている「親子のコミュニケーション」では明確な差が見られた。t検定により、「親子のコミュニケーション」の主成分得点を比較すると、沖縄の小学生の方が低いことが明らかになった。

図表4-1-1) 親子のコミュニケーション得点の県別比較



	沖縄	N	平均値	標準偏差	確率
親子のコミュニケーション	県外	1233	.30	.91	**
	沖縄	322	.06	1.01	

試みとして、「親子のコミュニケーション」に含まれる「会話」や「理解」の項目についてカイ2乗検定で比較した結果が以下の表である。「家の人とよく学校や友だちの話をする」について「よくあてはまる」と回答した割合は、県外45.6%であるのに対し、沖縄33.9%と10%以上低くなっている。理解でも同様の傾向が見られた。

これらのことから沖縄の小学生は親子のコミュニケーションが不足していることがわかる。

表4-1-1) 保護者との会話の県別比較 (小学生：1%水準で有意)

			家の人とよく学校や友だちの話をする				合計
			まったくあてはまらない	あまりあてはまらない	すこしあてはまる	よくあてはまる	
県	県外	度数	107	226	368	587	1288
		県の%	8.3%	17.5%	28.6%	45.6%	
	沖縄	度数	37	85	110	119	351
		県の%	10.5%	24.2%	31.3%	33.9%	
合計		度数	144	311	478	706	1639
		県の%	8.8%	19.0%	29.2%	43.1%	

表4-1-2) 保護者の理解の県別比較 (小学生：1%水準で有意)

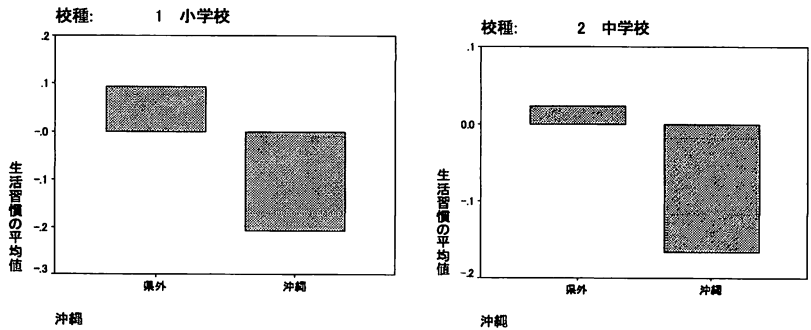
			家の人は、自分のことをよく分かってきている				合計
			まったくあてはまらない	あまりあてはまらない	すこしあてはまる	よくあてはまる	
県	県外	度数	45	159	377	705	1286
		県の%	3.5%	12.4%	29.3%	54.8%	
	沖縄	度数	31	48	129	145	353
		県の%	8.8%	13.6%	36.5%	41.1%	
合計		度数	76	207	506	850	1639
		県の%	4.6%	12.6%	30.9%	51.9%	

ちなみに、今回公表された文科省のデータでも、同様の結果が出ている。例えば、先ほども取りあげたように「家の人と学校での出来事について話をしていますか」という質問があるが、「している」割合が小学生（公立）の場合、全国37.4%なのに対して沖縄32.6%と差がついている。つまり沖縄の方がコミュニケーションは不足しているという結果であり、本調査の結果と一致する。

(2)生活習慣

次に小学生の場合も中学生の場合も学力に有意な影響を与えていた「生活習慣」について比較してみたい。生活習慣の主成分得点をt検定により比較したのが次の図表である。

図表4-2-1) 生活習慣得点の県別比較



グループ統計量^a

	沖縄	N	平均値	標準偏差	確率
生活習慣	県外	1233	.09	.97	**
	沖縄	322	-.21	1.05	

^a. 校種 = 小学校

グループ統計量^a

	沖繩	N	平均値	標準偏差	確率
生活習慣	県外	1151	.02	.98	**
	沖繩	454	-.17	1.06	

^a. 校種 = 中学校

この得点も沖縄の方が低くなっている。つまり沖縄の方が県外に比べて基本的な生活習慣が乱れていることを示している。

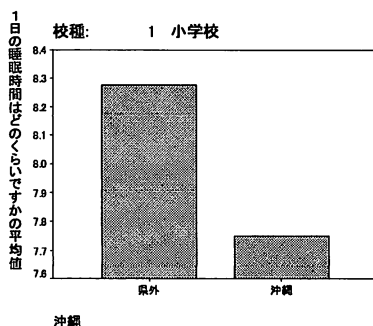
冗長かもしれないが、試みとしていくつかの項目について取りあげてみたい。

①睡眠時間

まず睡眠時間について比較してみよう。中学生では特に睡眠時間の差は見られなかったが、小学生では明らかな差が見られた。次の図表から明らかなように、県外の平均睡眠時間が8.28時間であったのに対し、沖縄では8時間に満たない7.75時間であった。沖縄の小学生は睡眠が不足しているようである。

なお、沖縄の小学生の睡眠が不足している状況は今回の文科省データでも確認されており、本調査結果と一致している。

図表 4 - 2 - 2) 睡眠時間の県別比較



グループ統計量^a

	沖縄	N	平均値	標準偏差	確率
ふだん（月曜-金曜）、1日の睡眠時間はどのくらいですか	県外	1222	8.28	1.26	**
	沖縄	329	7.75	1.74	

^a 校種 = 小学校

②規則正しい睡眠

規則正しい睡眠について比較したものが次の表である。ここでは沖縄の小学生の睡眠が乱れていることがわかる。表は省略するが中学生の場合も同様の傾向が見られた。

表4-2-1) 規則正しい睡眠の県別比較（小学生：1%水準で有意）

			ふだん（月-金）朝起きり、夜寝たりする時間が決まっている				合計
			まったくあてはまらない	あまりあてはまらない	すこしあてはまる	よくあてはまる	
県	県外	度数	219	271	404	394	1288
		県の%	17.0%	21.0%	31.4%	30.6%	100.0%
沖縄	度数	91	91	91	76	349	
	県の%	26.1%	26.1%	26.1%	21.8%	100.0%	
合計	度数	310	362	495	470	1637	
	県の%	18.9%	22.1%	30.2%	28.7%	100.0%	

ちなみに、今回の文科省調査でも「毎日、同じくらいの時刻に寝ていますか」という、本調査とほぼ同様の項目があるが、同様の結果が出ている。「している」割合が小学生（公立）の場合、全国36.9%なのに対して沖縄33.6%と差がついている。つまり沖縄の方が規則正しい睡眠が乱れているという結果であり、本調査の結果と一致する。

③朝食の摂取

朝食の摂取状況についても差が見られた。次の表では沖縄の小学生の朝食の摂取状況は県外に比べて低くなっていることがわかる。表は省略するが中

学生の場合も同様の傾向が見られた。

表4-2-2) 朝食の摂取の県別比較 (小学生：1%水準で有意)

		毎朝、朝食を食べる				合計
		まったくあてはまらない	あまりあてはまらない	すこしあてはまる	よくあてはまる	
県外	度数	21	47	143	1084	1295
	県の%	1.6%	3.6%	11.0%	83.7%	100.0%
沖縄	度数	11	26	44	272	353
	県の%	3.1%	7.4%	12.5%	77.1%	100.0%
合計	度数	32	73	187	1356	1648
	県の%	1.9%	4.4%	11.3%	82.3%	100.0%

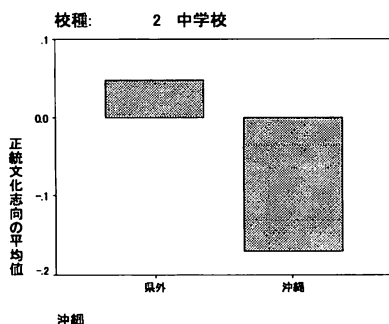
ちなみに、今回公表された文科省のデータでも、同様の結果が出ている。例えば、先ほども取りあげたように「朝食を毎日食べていますか」という質問があるが、「している」割合が小学生（公立）の場合、全国86.3%なのに対して沖縄81.8%と差がついている。これも本調査の結果と一致する。

以上のように、残念ながら沖縄の子どもたちの基本的生活習慣は乱れているということが示された。

(3) 家庭の文化

次に中学生で学力に有意な影響を与えていた「正統文化志向」について検討してみたい。下の図表は「正統文化志向」の主成分得点を比較したものである。その結果、沖縄の得点が有意に低いことがわかる。つまり、沖縄の中学生の家庭環境として、再生産論で比較的高度とされる文化（ここでは文学作品、クラシック、ピアノ、パソコン等）のストックが不足しているということになる。

図表 4 - 3 - 1) 正統文化志向得点の県別比較



グループ統計量^a

	沖縄	N	平均値	標準偏差	確率
正統文化志向	県外	692	.05	.97	**
	沖縄	467	-.17	1.00	

^a. 校種 = 中学校

一例として、パソコンやワープロの使用について比較してみよう。次の表を見ると、やはり沖縄の家庭のパソコンやワープロの使用率は他県に比べて低いことがわかる。

表 4 - 3 - 1) パソコン等の使用状況の県別比較 (中学生 : 1%水準で有意)

	パソコンやワープロをする				合計	
	ほとんど しない	あまりし ない	すこしする	よくする		
県 県外	度数	167	109	172	260	708
	県の%	23.6%	15.4%	24.3%	36.7%	
県 沖縄	度数	196	61	99	119	475
	県の%	41.3%	12.8%	20.8%	25.1%	
合計	度数	363	170	271	379	1183
	県の%	30.7%	14.4%	22.9%	32.0%	

まとめと考察

これまで本調査結果と文科省調査結果を比べながら見てきたように、本調査結果は、文科省が今回行った悉皆調査結果とほぼ一致しており、サンプリング調査ではあるものの信頼性が高いことがあらためて確認された。そうした前提をふまえて、以下に考察してきたいが、もう一点確認しておきたいことがある。

本研究で行われた学力テストや文科省の学力テストを根拠にしながら考察を進めていくが、これらはたかがペーパーテストの結果であり、子どもたちに本当に必要な学力ではないのではないか、という批判もありうるだろう。このようなペーパーテストに一喜一憂する必要はないという指摘であり、そうした批判はある程度理解できる。

しかし注目したいのは、本研究の学力テストは、極めて基礎的な問題からなっているということである。例えば本研究の学力テストは、計算問題や漢字の読み書きなど、通常のテスト問題の一問目から三問目に出題されるような基本中の基本であり、社会生活を行っていくうえで必要不可欠な知識である。また文科省の学力テストも、特にAは基礎・基本である。そうした基礎部分において、沖縄が全国と比較してこれだけ明確な差が出ているという事実からすると、たかがペーパーテストと片付けることはできないだろう。

以下ではそうした前提をふまえて考察を行いたい。

(1) 保護者の教育意識の重要性

これまで述べてきたように、学力テストと生活実態調査の結果を同時に見てみると、沖縄の学力が低い背景には、残念ながら家庭環境、特にしつけを含めた家庭の教育力の弱さが関わっていると言わざるを得ない。基本的な生活習慣の乱れはそこに起因していると言える。そうした問題を改善していくために重要なのは保護者の教育意識であろう。

例えば、今回の調査データの分析結果では、朝食と学力の関係が明らかに

なっているが、これは子ども本人の問題と言うよりは保護者の問題と言える。なぜならば、朝食を子どもが勝手に作って食べるわけではないからである。多くの場合、それは保護者の責任である。

また、規則正しい睡眠もまた、多くの場合保護者の責任と言える。特に生活習慣が定着しない小学生のうち、「早く寝なさい」などの保護者の声かけが必要である。そういうことの繰り返しにより、生活習慣は身についていく。

このように、子どもの学力には保護者の教育意識を含めた家庭環境が大きく関わっていると言えるので、今回の文科省の結果や本研究の結果を受けて、まずは認識をあらためることが必要である。朝食を食べる、規則正しい睡眠をとるなど、明日からでもすぐにできることからまず始めるべきであろう。しかもそうしたことは、学力にとってだけでなく、体の健康にとってもよいことである。家庭でできることは何かをまず考えることが重要である。

(2)家庭支援等に財政措置を

ただし、沖縄の低学力問題は、単に家庭だけに責任を押しつけて解決できるものではないと私は考えている。もちろん、今回はふれることができなかったが学校でできることもある。しかしそれにもまして重要なことは、行政にできることは何かという視点であろう。

いまさら指摘するまでもないことであるが、最初に述べたように沖縄の経済状況は極めて厳しい。沖縄県の県民一人あたりの平均所得は全国最下位であるし、関連して失業率は全国1位、離婚率も全国1位である。これらのことから単純に考えると、沖縄には、例えば、所得が低く生活するのがやっとの母子家庭も多いということになる。子どもを残して夜働きに出る保護者も多い。こうした家庭にとっては、夕食を一緒に食べたり、毎日朝食を食べさせたりすることさえ難しいだろう。保護者の経済力と子どもの学力の相関は高いことはよく知られている。実は沖縄の学力問題は、教育問題を超えて、

経済問題であり格差問題であり階層問題であり、そして政治問題でもある。こうしたことから、今回の文科省の結果などを受けて、沖縄の生活困難層のさらなる財政的な支援や教育機関に対する教育支出の増加が検討されれば幸いである。

今回の結果を受けて、文科相が低学力の地域には加配教員を多く配置するなどの措置をとるということを示唆する発言をしている。こうしたことも財政支援である。こうした教員増が実現すれば、例えば、少人数教育が教育効果を高めることはある程度明らかになってきている（例えば、西本 2007, 山崎他 2002）ので、「少人数学級化」へ利用することも可能である。このような行政的支援、政治的支援も含めた検討が必要であろう。

ちなみに、OECD（2004）のデータによると、我が国の教育機関に対する支出の対GDP比は、先進国29カ国中28位であり、下位に位置している。学力世界一と言われるフィンランドの支出が6.0%に対して日本は3.5%と、約半分である。沖縄の問題に限らず、そもそも我が国のこうした教育予算の実態の見直しも検討していく必要があるだろう。

(3) データを示し続けることの重要性

本調査でも文科省の調査でも明らかになったことであるが、朝食や睡眠がこれほどまでに学力に関わっていようとは、沖縄のほとんどの保護者はおそらく認識していなかったのではないだろうか。具体的に言えば、小学生（公立）の国語Aでは、「朝食を毎日食べていますか」について「している」と回答した児童の正答率が82.8%なのに対し、「全くしていない」と回答した児童の正答率は68.9%である。国語Bでも64.0%に対し44.0%、算数Aでは83.7%に対し66.3%、算数Bでは65.0%に対し47.1%と大きく差がついている。これだけ見ても朝食の摂取状況の悪い沖縄の学力が低いのも理解できるだろう。先ほども述べたが、これらは子ども本人の努力の問題と言うよりは、保護者の意識の問題と言える。もちろん、子ども本人の努力も大切である。

勉強時間などは子ども本人の努力の問題とも言える。しかし、学力は再生産論的に言えば、子ども本人の努力だけでは決まらないものであり、保護者が子どもの学習環境を整えること、子どもの学習をバックアップすることの方がむしろ重要であると言える。

ここで興味深いデータを紹介したい。今回文科省が発表したデータであるが、小学生の場合、平成13年度76.0%、平成15年度77.7%、そして今回の平成19年度86.3%と、全国の朝食の摂取率が上がってきているのである。先ほどもふれたが、文科省は「早寝早起き朝ごはん国民運動」を推進している。今回の上昇はその成果とも言える。

学力と朝食が密接な関係にあり、子どもにとっての朝食がいかに大切かをデータにより保護者が徐々にでも認識し始めると、生活習慣が改善されてくる可能性を示唆するものである。

同様に、睡眠や保護者との会話の重要性など、公表データにより徐々に認識され始めれば、保護者の認識や行動にも変化が及ぶ可能性がある。大切なのはこうした結果を発信し続けることであろう。

(4)教育社会学における本研究の位置づけ

周知のようにこれまで、社会学及び教育社会学研究において、家庭環境が学力や教育達成に大きな影響を与えているということが明らかになっている。アメリカのコールマン（1966）のあと、多くの研究が行われるとともに、フランスのブルデュー（1970）、イギリスのバーンステイン（1971）など、再生産論として多くの研究が蓄積された。

我が国においても、それらに触発された多くの研究がある。ブルデューに基づき文化のヒエラルヒーに注目した宮島・藤田編（1991）や階層間格差に注目した荻谷・志水編（2004）、耳塚（2007）、マイノリティ問題に注目した池田（2000）、原田編（2002）などである。これらの研究では、親の学歴、収入、職業、文化的活動などといった家庭環境変数が、学力に対して影響を

与えていることを、調査に基づき実証的に明らかにしている。

こうした研究蓄積により、社会学の分野では以前より常に問題になっていたものの(例えば、安田 1971, 富永 1979, 原・盛山編 1999)、これまであまり目立たなかった我が国の階層格差問題に光があたり、「格差社会」といった言葉に象徴されるような社会問題として認識されるようになったととらえることができる。

また何度もふれているように、文科省による全国学力調査でも、学力テストと同時に児童・生徒の生活習慣や学習環境などを聞く質問紙調査も行われているが、この手法ももとはと言えば、上述の教育社会学の研究において頻繁に用いられてきたものである。このようにこれらの研究は、社会や政策に大きなインパクトを与え、政策科学としても大きな役割を担ってきたと言えるだろう。

本研究も、そうした先行研究の流れを受け、沖縄の低学力問題を一種の階層問題と捉え直すことにより、これまでの研究手法を応用している。

(5) ランキングにとらわれることなく課題発見を

沖縄の低学力の実態が明らかになったわけであるが、これで意気消沈してばかりもいられない。今回の結果を今後に生かすことが重要である。そもそも学力テストと同時に学習状況調査が実施されたのは、単なる学力テスト正答率の県別ランキングを出すことが目的ではなく、学力の低い原因を地域ごとに分析することにより明らかにし、それを課題として今後に生かすためである。その意味では、今回の調査結果のランキングの部分だけにとらわれることなく、むしろ課題を見つけるよい機会としてとらえ、来年度以降に備えることが大切だろう。学力調査は来年度以降も継続される予定である。ここから新たなスタートである。

単に正答率の羅列や比較に留まれば、上に示したような県別比較ばかりでなく、地域間比較、学校間比較も技術的には可能であるので、多くの地域で

得点だけが独り歩きしランキングが始まり、大きな混乱をもたらすと予想される。今のところ得点の詳細な公表には慎重な姿勢を見せている自治体も多いが、地域の圧力によって徐々に公開が始まれば、本研究で沖縄を例にして示したような分析はすべて可能となるので、思わぬ目的で使用されかねない。目的に応じて正しく使用される必要がある。特に、学校選択制を導入している地域（沖縄では那覇市）での学校ごとのランキングが始まれば、大混乱が予想される。

いずれにしても、本研究で示した沖縄の学力問題を考察する際の分析視点は、同様に低学力問題を抱える多くの県や地域にも応用できるものと考えられる。こうしたデータが正しく使われれば、どの自治体、地域、学校単位間でも分析でき、それぞれの地域、学校の抱える問題点を明らかにできるだろう。有効利用が必要である。

注1) ここで用いたデータは科学研究費補助金（基盤研究（B）（2）課題番号16330165：平成16～18年、研究代表者：山崎博敏）の交付を受けて行った調査による。

注2) 本文中で紹介した文科省公表のデータは、以下のHPアドレスより取得できる。

http://www.nier.go.jp/homepage/kyoutsuu/tyousakekka/1hp_tyousakekka_gaiyou_shou.htm

<参考文献>

Blau, Peter M. and Otsi D. Duncan, 1967, *The American Occupational Structure*, Wiley. Coleman, James S., *et al.* 1966, *Equality of Educational Opportunity*, U.S. Government Printing Office.

荻谷剛彦・志水宏吉編, 2004, 『学力の社会学－調査が示す学力の変化と学習の課題』岩波書房。

- Bourdieu, P. & Passeron, J.C. 1970, 宮島喬訳『再生産』藤原書店。
- 山崎博敏・世羅博昭・伴恒信・金子之史・田中春彦, 2001, 「学級規模の教育上の効果—教員調査を中心に」『教科教育学研究』第19集, 255-273頁。
- 山崎博敏・世羅博昭・伴恒信・金子之史・田中春彦, 2002, 「学級規模の教育的効果：児童生徒調査を中心に」『教科教育学研究』第20集, 107-124頁。
- 原純輔・盛山和夫 1999, 『社会階層 豊かさの中の不平等』東京大学出版会。
- Bernstein, B. 1971, *Class, Code and Control*, Vol.1, Routledge & Kegan Paul.
- 耳塚寛明, 2007, 「小学校学力格差に挑む だれが学力を獲得するのか」『教育社会学研究』第80集, 23-39頁。
- 宮島喬・藤田英典 1991, 『文化と社会』有信堂。
- 西本裕輝 2002, 「沖縄の低学力問題に関する実証的研究」『人間科学 (琉球大学法文学部人間科学科紀要)』第9号, 1-18頁。
- 西本裕輝 2004, 「学力の規定要因再考—中・高校生を対象とした調査データの試行的分析—」『人間科学 (琉球大学法文学部人間科学科紀要)』第13号, 89-107頁。
- 西本裕輝 2007, 「学級規模が授業に与える影響に関する実証的研究—小学校における教員調査を中心に—」『人間科学 (琉球大学法文学部人間科学科紀要)』2007年, 第19号, 67-82頁。
- 池田寛 2000, 『学力と自己概念』解放出版社。
- 原田彰編著 2003, 『学力問題へのアプローチ—マイノリティと階層の視点から』多賀出版。
- 安田三郎 1971, 『社会移動の研究』東京大学出版会。
- 富永健一 1979, 『日本の階層構造』東京大学出版会。